

師団設置による都市形成への影響に関する一考察

—旧陸軍第十一師団と善通寺市の変遷を事例として—

A Study of The Effect on Urban Formation by The Establishment of Division
In a Case of The Transition of Zentsuji City and Army's 11th Division

柴田 久**

By Hisashi SHIBATA

Abstract : It is very important to research the relation between civil engineering history and the military. The purpose of this article is to consider and clarify the effect on urban formation by the establishment of division. This case is the transition of Zentsuji City and Army's 11th division. The methods are historical materials collection and interview about Zentsuji City and Army's 11th Division. The summary of the result is : 1) The modern urbanization of Zentsuji was advanced by the militaristic thought. 2) Zentsuji city formed the original society system by the change of space and industrial structure by the establishment of division. 3) A part of inhabitant became a victim of the militaristic urban formation.

1. はじめに

(1) 本研究の背景と目的

近代日本の歴史は、日清・日露といった戦争の歴史と言っても過言ではないだろう。日本最初の対外戦争である日清戦争で得た賠償金は2億3000万両(当時邦貨3億6000万円)におよび、その約84%は軍事費に使われたとされている。明治以降の戦争に対する防衛施設の設置と推進は、近代土木技術の活用を不可欠とし、その後の都市形成においても多くの影響を及ぼしたと推察される。近代における我が国の都市形成を土木史的観点から考える上で、軍事との関連を検討することは極めて重要な視点ではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、本研究では明治以降に旧陸軍の戦略単位として全国に配備された「師団」の設置について着目する【図-1】。本稿ではその基礎的論考として1898(明治31)年に陸軍第十一師団の置かれた香川県善通寺市を事例として取り上げ、師団設置が善通寺の都市形成に与えた影響について考察を行った。

(2) 研究対象地の概要と選定理由

本研究で事例として扱う善通寺市は、面積39.88km²、人口35,208人、世帯数13,845(2003(平成15)年現在)の田園都市である【図-2】。周囲には屏風状に連なった五岳山(香色山・筆の山・我拝師山・中山・火上山)が立ち並び、古来より地元では「出水」と呼ばれる湧き水の

*keyword : 陸軍第十一師団、善通寺市、都市形成、軍事

**正会員 博(工) 四国学院大学社会学部応用社会学科助教授
(〒765-8505 香川県善通寺市文京町3-2-1)

存在した、香川県下では珍しく水資源の豊かな地域である。善通寺市の母体である善通寺村は江戸時代に盛んとなった四国霊場巡礼に伴う門前町として発展し、その後、明治に師団が設置されることによって急激な都市化が進んでいった。師団設置後の1901(明治34)年には、隣接する吉田村、麻野村と合併して善通寺町となり、現在の善通寺市の基盤を確立させている。

本稿で善通寺市を事例選定した理由として、著者の所属する大学所在地につき、現地踏査や現存する多くの史料を入手しやすかった点もさることながら、①当時、城下町に設置されていた師団が全国で初めて城下町以外の

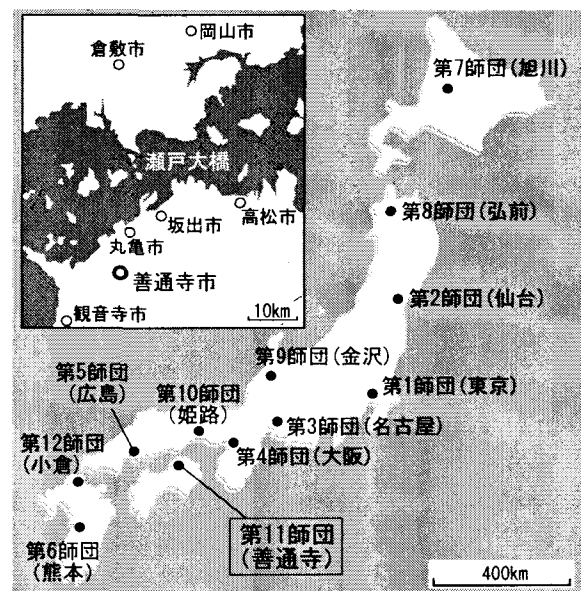


図-1 1896(明治29)年当時の師団配置と善通寺市周辺
(筆者作成)

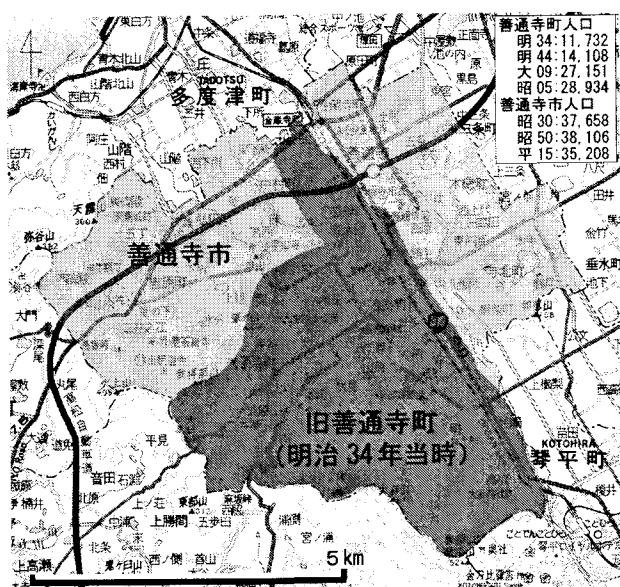


図-2 事例対象地 普通寺
(普通寺統計書(市総務部発行)を基に筆者作成)

田舎町に設置された事例であること(第3章で詳述)②それにより師団設置に伴う大規模なインフラ整備が行われ、自然豊かな門前町から軍都へと、都市の空間変容が急激に進んだことなどが、土木史的な研究アプローチをより明確にできるものと考えたためである。

(3) 先行研究と本研究の位置づけ及び分析方法

近代日本を対象とした軍事史研究では、軍隊史・戦争史¹⁾及び国土防衛史²⁾など、数多くの成果が提示されている。ここには戦争に至る時代的背景から戦時中の軍備戦略の経緯、政治勢力としての軍部等、我が国における当時の軍事的状況が克明に記述され、天皇や徴兵制を中心とした制度史的なアプローチなど多岐に渡っている。その一方で荒川は、これまでの軍事史研究の軍政と国民動員政策(とその影響)といった「国家レベル」での視点に問題提起し、静岡県を事例とした「地域社会と基地・軍隊との関係」を史的考察している³⁾。同研究の「地域と軍隊」の関係史的視点は本研究の分析視点と同スタンスといえるが、荒川はここで兵事行政や対軍感情など、軍と地域民衆との戦争協力関係の時代的変化を主眼に捉え、当該地域の軍備に関わるインフラ整備といった空間的変容についてはほとんど触れていない。

これに対し、近代における軍事施設を土木史的観点から考察した先行研究として、星野らの砲台跡地を対象とした研究⁴⁾がある。同研究では土木史研究における軍事施設研究がほとんど行われていないことを指摘した上で、砲台跡地の全国調査からその現状を把握、分類している。さらに日高らは、主に軍用地の転用である飛行場に着目し、その立地傾向と都市計画上の位置づけについて考察している⁵⁾。また本稿の関連研究として旧陸軍普通寺第十一師団の建築施設群に対する大規模調査⁶⁾が1999(平成11)年に日本建築学会四国支部によって行われている。

この研究では2001(平成13)年に国の重要文化財となった師団施設「旧偕行社」と第十一師団司令部の建築構造・意匠等について詳細な調査結果が報告されている。しかし、本研究が主眼とする師団の設置による広域的な都市形成の空間的変容及び地域社会への影響を考察した土木史研究は未だ管見では見当たらない。

よって本稿では分析方法として、師団が普通寺の都市形成に与えた影響を人口、住戸数、地価、商工業の変化、さらに道路・鉄道などのインフラ整備と師団を念頭に立ち上げられた周辺施設の設置経緯等から推察し、1945(昭和20)年終戦までの当時の軍と地域との関係性を歴史的に追跡していく。ここでは普通寺市及び第十一師団に関する史料収集に加え、師団終焉後に配置された現在の陸上自衛隊第2混成団普通寺駐屯地広報室、普通寺市立郷土館、及び「普通寺市史」編さん室元室長等へのヒアリング調査を敢行し検証を進めた。

2. 師団設置前の普通寺(近世～明治初期)

前述した普通寺市の母体、普通寺村は、弘法大師空海の生誕地として知られ、「普通寺」という名は空海の父の法名から付けられている。その名の通り、近世の普通寺村は、真言宗普通寺の宗教都市として成立し、前述したように四国八十八カ所巡礼や金比羅参りに伴った普通寺



図-3 名東県時代の普通寺村略図
(原図:普通寺市立郷土館蔵を基に
記載されている字名と戸数を筆者が拡大記入)

の門前町として栄えてきた。明治初期の善通寺周辺は、高松藩、丸亀藩、多度津藩によって統治されていたが、廃藩置県によって多度津藩は倉敷藩と併合され、高松藩と丸亀藩がそれぞれ高松県・丸亀県となっている⁷⁾。香川県が初めて誕生したのは高松県と丸亀県が統合した1871（明治4）年のことである。しかし、当時の香川県は他県に度々吸収されるなど、政治的に不安定な状況にあった。1873（明治6）年には香川県は名東県（現在の徳島県）に併合され、2年後には名東県から分離し再び香川県（第2次）、1年後の1876（明治9）年には香川県は廃止され愛媛県に併合されている。愛媛県時代は10年ほど続き、明治21年勅令第七号によって香川県（第3次）が設置されている（これは全国で最も遅く誕生した県である）。当時の善通寺村役場文書「庶務一件綴」によると、1884（明治17）年12月31日付けの善通寺村の総戸数は622戸、そのうち職業構成は農が70%、商10%、工5%、日傭・雑業15%の内訳となっている。しかし、上記の内訳中、農は専業農家のみの戸数であり、兼業農家の159戸を加えると、総戸数の約90%が農業に携わっている状況であった。図-3は名東県当時の善通寺村略図であるが、図中には当時の戸数が「字〇〇 △戸」と書き込まれている。これによると、後に師団が設置される善通寺境内周辺の戸数は約250程度であり、主な建造物も善通寺以外、存在していないのが分かる。さらにその後、第3次香川県時代、市制・町村制が施行された1890（明治23）年の翌年、善通寺村の人口は3,099人、戸数は637であった⁸⁾。当時、周辺村で最も人口・戸数の多い竜川村でも3,737、戸数799であり、同年末時点の香川県の人口が675,046、現住戸数131,121であったことを考えると⁹⁾、善通寺村の当時の閑散とした様子が窺えよう。

3. 師団設置による善通寺の変容（M29～T14年）

（1）師団設置の経緯

まず師団設置の経緯について触れておく。日本の陸軍において最初に「師団」という用語を公文に規定したのは、1873（明治6）年11月に制定された「幕僚参謀服務綱領」である¹⁰⁾。同綱領第九には「後來台下一軍団ノ兵員ヲ増置シ、数師団二分ツ時ハ師団ノ将官毎二幕僚参謀部ヲ置ク」とし、その後の1878（明治11）年12月制定の監軍本部条例によって師団の編制が明文化された。その後、1896（明治29）年、陸軍平時編制改正に伴い、四国を管区とした第十一師団の司令部設置が善通寺村に決定される【表-1】。師団は明治初期の軍編制単位「鎮台」を基礎とし、徴兵令施行後、鎮台の下に「旅団」という編制単位が設けられたことで行われた軍備拡張策と位置づけられる¹¹⁾。そのため、当時、師団司令部は県庁所在地かこれに次ぐ都市に設置されるのが通常とされ、城下町でない片田舎の善通寺村への設置決定は異例であった¹²⁾。設置候補地の一つとして高松

表-1 善通寺と第十一師団の歴史年表
（参考文献7、12、14を基に筆者作成）

年	善通寺の歴史	第11師団の歴史
明21 (1888)	丸亀町に讃岐鉄道株式会社が設立 香川県（第3次）が設置される	
明22 (1889)	讃岐鉄道株式会社が多度津を基点として丸亀―琴平間15キロにはじめて汽車を開通	
明23 (1890)	法律で市制・町村制を施行。善通寺、竜川、与北、象郷、吉原、麻野村、吉田村等ができる	
明29 (1896)		陸軍平時編成改正により第11師団司令部が仲多度郡善通寺村に設置が決定
明30 (1897)	・讃岐鉄道。高松―丸亀間開業 ・讃岐電灯株式会社創立	師団設置工事（第1期）
明31 (1898)		・第11師団司令部が開庁する ・遊廊の工事着手
明33 (1900)	高松百十四銀行が善通寺に善通寺支金庫を設置し、国庫金の取り扱いを開始	・善通寺師団韓国守備隊が交代のため多度津に上陸、帰営
明34 (1901)	善通寺町の誕生	
明35 (1902)		第11師団台湾守備隊交代兵が多度津に帰還
明36 (1903)		・信託社新築落成 ・皇太子（天正天皇）第11師団に御大臨、練兵場で観兵式が挙行
明37 (1904)	讃岐鉄道、山陽鉄道への合併	・日露戦争が起こる ・対露宣戦布告により、第11師団に動員命令が下る
明39 (1906)	鉄道国有法公布により山陽鉄道国有化	練兵場にて招魂祭を実施
明41 (1908)		第11師団が奈良県での陸軍特別演習参加
明44 (1911)		満州守備の第11師団司令部が詫間港に帰還
大2 (1913)	高松百十四銀行善通寺支店が開設	
大3 (1914)		第一次世界大戦が勃発
大5 (1916)		第11師団がシベリア出兵のため詫間港出発
大9 (1920)		シベリア派遣隊第11師団が詫間港に帰還
大11 (1922)	琴平参宮鉄道が丸亀―善通寺間に電車が開通 善通寺駅舎大改築落成	善通寺の練兵場で陸軍大演習
大13 (1924)	善通寺において関東大震災大警備演を施行	
大14 (1925)		歩兵第四十三聯隊が徳島に移転

市近郊も考えられていたが、「兵營地選定二関スル方針」¹³⁾に準じ、①多度津・詫間等の港湾が近いこと、②湧き水などの地下水源が豊富であったこと、③大麻山、五岳山といった周辺環境が、演習時の軍事訓練に最適であったといわれている¹⁴⁾。また、第十一師団設置等に関して資料室を保持する陸上自衛隊第2混成団善通寺駐屯地の広報室（師団の史料や情報の管理と一般見学者への応対等を業務）に対し、インタビュー調査を行った。これによれば、上記3点に加え、④松山・高知・徳島の各連隊への運輸交通手段の便利さ（各連隊からの等距離地点）にあったことも理由として挙げられていた。1890（明治23）年に公布された陸軍定員令によると、第十一師団の平時編制は師団長以下、約9千人程度の将兵数が定員とされていた。しかし、実際

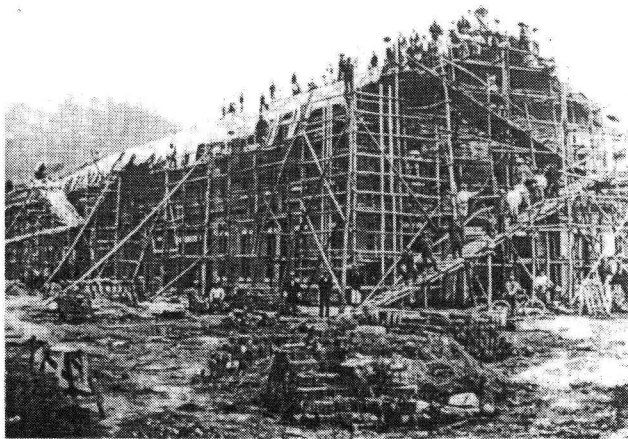


写真-1 旧第十一師団兵器庫建築工事の様子
(陸上自衛隊第2混成団本部乃木資料室所蔵)

には出兵や衛戍病院への入院患者、徴兵に対する逃亡行動など、その実人数の増減は激しかったものと推察される。当時の師団開設決定に対し、善通寺村に隣接する吉田村では、師団設置工事（第1期）が始まった1897（明治30）年の翌年に作成された役場文書「雑件」において「師団新設ノ結果、戸数ノ繁殖多大ナル今日ニシテ、数年ヲ出デズ一大都市トモナルベキ有望ノ地ニ付」¹⁵⁾との観測を記述しており、師団に対し多大な期待を寄せていたことが分かる。師団開設に伴う関連諸営舎・施設の建設、将校兵の結集による需要を見込み、地域の商況が盛んであったことが窺えよう。以上のような経緯を辿り、1898（明治31）年12月1日、第十一師団は善通寺に開庁されることとなる。

（2）地価の高騰と人口増加

1896（明治29）年、師団設置の決定を受け、善通寺にまず影響を及ぼしたのは地価の高騰であった。当時の香川新報（四国新聞の前身）には、第十一師団の用地の総買収面積について「百八町八反五畝二十五歩」（一町＝約0.991ヘクタール）と報じており¹⁶⁾、善通寺村の地価について「一反歩七十圓位の地は三百圓位に上騰せる様報し置きたる處昨今の處にては一反歩六百圓或は七百圓と云う有様にて殆と手を兼る向も少なからず」とし¹⁷⁾、当時の地主による地上げの横暴さが記されている。また師団用地の買収に伴い、地主が小作への償金を一反歩につき三十円交付する取り決めであったにもかかわらず、手数料と称した七円を差し引く二十三円しか支払わない事件が起こるなど、小作者らによる訴訟問題がこの頃浮上している。一方、このような状況下、1897（明治30）年、師団設置の第一期工事として騎兵第十一連隊、歩兵第四十三連隊、野戦砲兵第十一連隊（1922（大正11）年に山砲兵第十一連隊に改称）及び歩兵第二十二旅団司令部の各営舎の供用が開始されている【図-4】。また翌1898（明治31）年には第二期工事として施工された輜重兵第十一大隊、工兵第十一大隊、さらに第十一師団司令部の各営舎の整備が完了している。これらの工事期間中、善通寺には師団工事関係者300～400人

表-2 明治期における善通寺町の人口と戸数
(「善通寺市史 第三巻」より抜粋)

明治	人口			戸数
	男	女	計	
34	6,780	4,952	11,732	2,344
35	7,052	5,122	12,174	3,199
36	5,616	5,428	11,044	2,385
37	7,019	5,244	12,263	3,422
38	7,237	6,561	13,798	2,542
39	7,563	6,642	14,205	2,627
40	7,645	6,786	14,431	2,704
41	7,273	7,348	14,621	3,806
42	6,461	7,280	13,741	3,318
43	6,647	6,948	13,595	2,536
44	7,036	7,072	14,108	2,745
45	7,238	7,125	14,363	2,984

が、さらに工事の最も盛んな時期には2000～3000人を越えるほどの人々が流入したとされている【写真-1】。表-2は師団設置後、1901（明治34）年から大正期までの人口と戸数をまとめたものであるが、これより各年次の人口及び戸数の変動が大きいことが看取される。これは戸数・人口の比較的定着している農村と異なり、師団の置かれた市街地においては、景気により街の状況が大きく左右されること、さらに女性に比べ男性人口と戸数に大きな増減があることから、職を求めて出入りする一時的寄留者が多いことが示されている¹⁸⁾。これら人口の流入によって、必然的に家屋の需要も高まり、前述した地価「一反歩六百圓或は七百圓」は、1898（明治31）年には約2.5倍の1800円までに膨れあがっていた¹⁹⁾。

（3）軍都善通寺の道路整備

1898（明治31）年の師団設置から大正期における善通寺では軍用地を中心に据えた各種インフラ整備が推進されている。表-3²⁰⁾は当時の香川県下の道路状況を示したものであるが、これによると1908（明治41）年度末時点での国道は4線、そのうち三十一号（現国道11号線）、三十二号（現国道319号線）、五十号の3線は東京と県庁地を結ぶ整備目的であるのに対し、善通寺線は「東京ヨリ十一師団地ニ達ス」との目的で国道整備がなされているのが分かる。また表-4の国道の改修状況に関するデータを見ると、三十一号線、五十号線と比べ、善通寺線の改修面積5171.11坪に対し、6896.749円と他の国道改修工費より割高であるのが分かる。また道路延長が557.64間で他の国道に比べ短いのにに対し、面積は5171.11坪あり、善通寺線の幅員（平均9.27）の広さが看取できる。これらのことから、師団による大規模な軍事輸送に耐えうる道路整備が求められていた当時の善通寺の様子が窺い知れよう【写真-2】。さらに、これら師団を中心とした善通寺の道路形状について、図-4から市街地を縦横に貫く整然とした様子が看取でき

表-3 明治41年度末における国道の状況(香川縣史 第三篇上第三項「土木」より抜粋)

線路名	目的	起地点名	過経地点	終点地名	延長	面積
三十一号線	東京ヨリ愛媛県 庁二達ス	丸亀市西平山町字新堀丸 亀港	丸亀市龍川村大見村 笠田村本山村豊浜町	三豊郡和田村大字箕 浦宇島越	九里十八丁〇 間二分	四万九千三百九十 八坪五号八勺
三十二号線	東京ヨリ高知県 庁二達ス	仲多度郡龍川村大字金蔵 寺字本村三十一号国道	善通寺町琴平町	三豊郡財田村大字財 田上字猪ノ鼻	七里〇丁三十 七間七分	五万二十坪四合一 勺
五十号線	東京ヨリ香川県 庁二達ス	丸亀市通町三十一号国道	丸亀市宇多津町坂出 町高松市	高松市内町香川県庁	七里十五丁四 十六間二分	四万一千三百九十 坪九号四勺
善通寺線	東京ヨリ十一師 團地二達ス	仲多度郡善通寺村大字吉 田三十二号国道	善通寺町	仲多度郡善通寺町大 字善通寺字六地藏	九丁二十二間 三分	五千二百十四坪八 合五勺

表-4 明治21年12月～明治41年度末における国道の改修状況
(香川縣史 第三篇上第三項「土木」のデータを基に筆者作成)

線路名	施工区域	道路			
		延長(間)	面積(坪)	平均幅員 (坪/間)	工費(円)
三十一号線	三豊郡本山村・一ノ谷村	371.70	1115.100	3.00	979.180
	仲多度郡吉原村・三豊郡大見村地内鳥坂	2055.40	5138.500	2.50	3523.168
	三豊郡大見村・下高瀬村地内仁地付近	160.60	396.440	2.47	772.500
	三豊郡一ノ谷村・常盤村地内原坂	118.20	295.500	2.50	504.050
		計 2705.90	計 6945.54		計 5778.898
五十号線	綾歌郡府中村字綾坂	1289.00	3222.500	2.50	2250.000
	丸亀市御供所汐入橋前後	8.00	30.400	3.80	73.590
	綾歌郡賀茂村・府中村地内綾川橋前後	217.42	548.916	2.52	799.193
	香川郡上笠居村字衣掛	114.50	284.098	2.48	340.542
		計 1628.92	計 4085.91		計 3463.325
善通寺線	仲多度郡善通寺町	557.64	5171.110	9.27	6896.749
		計 557.64	計 5171.11		計 6896.749

る。次項で述べる 1922 (大正 11) 年に改築された善通寺駅から善通寺境内五重塔南までの直線道路は約 1.2 km に及んでいる。1903 (明治 36) 年には当時の善通寺町長を發起人総代として、第十一師団を中心とした市街地道路等に街路樹の植栽が計画されているが、香川県知事への申請より前に、第十一師団司令部にその意向が打診されている²¹⁾。さらに善通寺では名東県時代より人力車が走っており、1903 (明治 36) 年からは師団で廃用となった馬を使用した乗合馬車が大正初期頃まで走行していた²²⁾。当時の乗合馬車は箱型・鉄輪の四輪車で、馬一頭のタイプと二頭のタイプがあり、馬一頭の馬車は定員が 10 名程度であった。その後は乗合自動車 (バス)、タクシーなどが往来するようになり、師団の入隊や除隊者の利用で賑わったとされている²³⁾。しかし、当時、道路用地は国家へ寄付 (献納) することが当然とされ、加えて広大な道路と激しい軍事輸送ゆ

えに莫大な復旧費を必要とするなど、善通寺町の土木財政状況は常に火の車であった²⁴⁾。当時の里道・県道は、泥濘に砂利を入れて固める整備方法が主流であったため、台風や大雨に弱く、補修のための支出が耐えない状況にあったといえる。

(4) 陸軍特別大演習に伴う鉄道整備

師団設置によって善通寺の生活環境を大きく変化させたものとして、讃岐鉄道と琴平参宮電鉄の開通があげられる。1906 (明治 39) 年に国有化される讃岐鉄道は、1889 (明治 22) 年に多度津を起点とし、丸亀ー琴平間で営業を始めている (これは 1888 (明治 21) 年に完成し営業を開始した伊予鉄道に続き、四国 2 番目の鉄道敷設である)。開業当時の客車は俗に「マッチ箱」と呼ばれる定員 20 名の小型のもので²⁵⁾、金比羅参りの通過地点にある総本山善通寺の参拝客の足として機能していた。しかし 1922 (大正 11) 年、師団設置以来の歴史的ビッグイベントである陸軍特別大演習が善通寺町で挙行されたことで、その様相に変化が訪れる。陸軍特別大演習とは、西軍 (第五師団・広島) と東軍 (第十一師団) によって三豊郡と仲多度郡において 3 日間の模擬戦闘が行われたもので、当時の皇太子であった昭和天皇が統監のため来場している。そのため様々な記念事業が行われ、その一つとして讃岐鉄道の善通寺駅が改修された。前述したように当時の善通寺駅は大変狭く、師団の大移動時などに限界が生じたため、これを機に改修がなされている。これについて当時の「香川新報」では「善通寺 新驛の美観大改修を加えて面目一新す」との見出しにより、以下のような記事を掲載している。

写真-2 師団兵の行進と善通寺大通りの様子
(角田一巳氏提供 吉岡伝三郎複写所蔵)

「本驛舎は切破風を造り平屋建にて建坪八十坪五合にて正面に車寄せ新設し此表面三間横二間一尺にて待合所は十間に五間南手にある二等待ち合所は二間半四方驛長室は二間半四方出札室は三間半四方北手にある小荷物室は二間半歩廊は幅二十一尺延長六百尺下り歩廊は幅六百尺延長十八尺線路の階段をアスファルト塗とし歩廊屋根を新に葺くなど何れも新築同様に面目一新した」²⁶⁾

善通寺駅の改修は町民に近代的な駅の風景を体験させ、定員を 80 名とする客車の輸送能力アップと共に、師団があることによる都市的な生活環境への変化を認識していったといえるだろう。さらに大演習の記念事業の一つとして琴平参宮電鉄（路面電車）が開業の運びとなる。開業当初から路線は徐々に広がり、琴平―坂出間さらに善通寺から多度津へと延長がなされている。私鉄電車の路線開通は、当時の国有鉄道と違って庶民の足としての感覚が強く、琴平、善通寺などへの参詣客の来訪にはかなり便利であったとされている²⁷⁾。しかし、全線開通までの路線計画は決してスムーズなものではなかった。1922（大正 11）年、丸亀―善通寺間の開通後は、琴平まで善通寺大師門を経由して延長する計画であったが、

当区間については翌年 1923（大正 12）年に一旦廃止を余儀なくされている。理由は周辺に立地した師団の輜重兵第十一大隊及び騎兵第十一大隊から、電車の騒音が軍馬の訓練教育上支障を来すとの異議が出されたことにある²⁸⁾。結果的には大演習が行われた翌年の 1922（大正 12）年以降、善通寺への参拝客と師団の軍人や家族の面会人の利便性を掲げた計 7 回にわたる電鉄会社の申請を経て、市街地を一巡する路線に変更がなされている【図-4】。

（5）師団を取り巻く善通寺の商工業

ここでは、師団設置によってもたらされた産業について見ていく。まず、1897（明治 30）年に讃岐電灯株式会社創立が挙げられる。設立直後ではあまり事業発展しなかった同社であるが、善通寺村周辺に位置する竜川村に発電所を設置し、師団開設にあたって電灯等の多大な電力を供給することとなった。その当時、善通寺方面に点灯が要請された際、1000 灯余りが讃岐電灯会社によって新設されている。一方で、師団設置に伴う様々な金融的要請を受け、1900（明治 33）年、高松百十四銀行が善通寺に支金庫を設置、国庫金の取り扱いを開始して



図-4 1922（大正11）年陸軍特別大演習統監部飛行隊が撮影した善通寺市街地
（原図：善通寺史付属資料図（角田一巳氏提供）に当時の師団と周辺施設の様子等を筆者加筆）

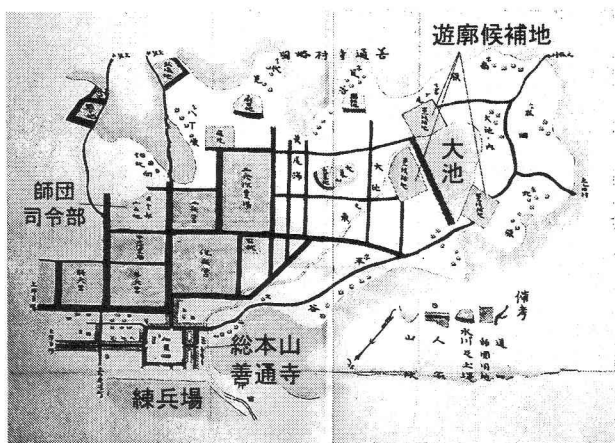


図-5 明治30年に描かれた善通寺市街地図（原図：善通寺村役場文書図面を基に記載内容等を加筆）

いる。さらに1913（大正2）年には善通寺支店が設置されている²⁹⁾。また善通寺駅前の通り（現在の上吉田町と文京町の境の通り）片原町付近では、戦時中、師団指定の旅館が建ち並び、特に戦局が激しく多くの兵隊が召集された際には、郷土から面会に来る家族の利用で大変賑わったという。また利用客数も多く、師団指定の旅館で部屋数が足りない場合には、間数の多い一般の民家が客を泊めたとされている³⁰⁾。片原町では旅館の他、師団相手の商店が建ち並び、兵隊の記念写真を撮影する写真館や軍靴を修理して販売する店、土産用として杯を売る店など様々な顔ぶれであった。この頃、農村部における麦稈真田共同販売組合の設立、さらに大正4年には仲多度郡同業組合が発足し、これに関連して善通寺町隣接村にも有限責任信用購買組合が設立されるなど、いわゆる経済行為の組織化が進行していった³¹⁾。一方、歳入の約7割を町税で賄っていた善通寺町の財政基盤においても、当時の予算表より1902（明治35）年～1913（大正2）年の合計予算額はおよそ平均3万7千円程度あり³²⁾、師団開設以前の1890（明治23）年の善通寺村の予算額は約1213円、吉田村では約997円であったことから、その急激な伸びが伺える³³⁾。

（6）遊郭の設置を巡る住民紛争

師団が善通寺の都市形成に与えた影響の特徴的な事項の一つとして遊郭地の設置がある。当時、師団工事のため多くの労働者が善通寺に流入したことは前述したとおりであるが、師団に入営する将士たちの流入も考え、善通寺では風紀の乱れが懸念されていた。その結果、「公娼を設けされは思はざるの惨状を極むること無しと言ひ難し」として遊郭の設置が県によって計画されている³⁴⁾。しかし、遊郭の設置場所については住民による紛議や分村問題（設置反対ではなく利権の絡んだ設置要求に関する紛議）が引き起こされている。香川新報³⁵⁾では当時の状況について以下のように報じている。

「村費は師団地たる以前は経常費一千六百円位なりしに

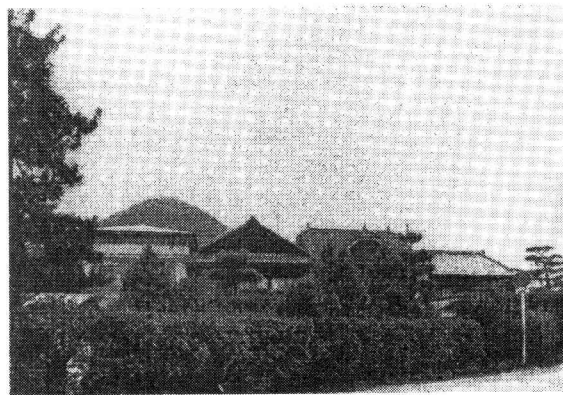


写真-3 明治末から大正期の遊廓の家並み（撮影：上野時生 参考文献6）より転載）

一朝師団地となるや大に増加し三十年度の経常費は二千八百餘にて殆と三千圓に垂らんとするに至りざるか却説前期の如く東北部の良知中多く免租地となりし土地の以前負擔せし経費に恩澤を被らざる西南部山間居住者が多く負擔せざる可からさることとなりたるのみならず彼の賑盛の地に住みし多く師団の恩澤を蒙る人民は公民権を有する者すら少なき有様なるを以て戸數割負擔の如きも西南部の住民に比すれば大に少なし慈に於てか遊廓地を西南部の地に相せば之に連れて諸種の商業家も出來掛ければ是非遊廓地は西南部の地に置かんと希望に全地方住民の頭脳は悉く之れありたり」

善通寺村はこれまで村の税収源であった土地の多くを官有地として失い、税収入不足を補填するために地租税督促に係る手数料条例の制定など、村費の増収を図ろうとした。そのため、軍用地として土地売買及び商いの恩恵を受けなかった善通寺西南部の住民の暮らしは貧窮を増し、特に善通寺大池周辺の住民は遊廓を誘致することでこれを回避しようとしたのである。しかし、西南部住民の県に対する再三の請願もむなしく、結果的には「兵舎から近すぎる」との理由から、県が計画当初に候補地としていた善通寺西部砂古裏地区に師団司令部開庁の1898（明治31）年、工事が着手されている。図-5は1897（明治30）年に書かれた善通寺市街地図であるが、これを見ると遊廓の設置場所として善通寺西南部大池周辺に候補地が描かれているのが分かる。しかし、前述した1922（大正11）年撮影の図-4では、それら大池周辺ではなく、師団から香色山及び総本山善通寺を隔てた西部地区に立地しているのが分かる。当初は15軒の廓があり常時50名ほどの娼婦がいたとされている【写真-3】。この遊廓問題の後、県は善通寺村の行財政運営の困難を懸念し、1901（明治34）年、前述した隣接する吉田村及び麻野村を合併させ、善通寺町が発足された。

3. 師団終焉と善通寺（T14～S20 年）

（1）昭和初期の善通寺経済

周知の通り、昭和初期の日本経済は 1921（大正 10）年に起こった関東大震災を引き金に、1927（昭和 2）年より全国を襲った金融恐慌によって大打撃を受けている。当然、香川県下においても同様の経済情勢であったが、善通寺町は例外として恐慌の影響を直接は受けていない。1926（大正 15）年、琴平銀行の休業や高松百十四銀行善通寺支店の取付けなど、銀行経営の不振が騒ぎとなっているが、善通寺支店の取付け期間はわずか一日という短期間のものであった³⁶⁾。これにはいくつかの理由が考えられるが、一つは善通寺町の第 2 次産業の割合が低かったことが挙げられる。さらに当時は第十一師団の存在と善通寺参詣道に沿った商店街が影響し、道路に関わる工事が増加するなど、町財政の歳出に見られる公共土木費の金額が比較的多かったため、住民が深刻な不況を感じる雰囲気にはなかった³⁷⁾。また「昭和二年第一回善通寺町会会議録」より、当時の予算編成について見てみると、招魂祭諸費に 1000 円を計上していることや、遊興税徴収交付金に 144 円増加となった理由を「遊興税徴収額が前年度に比して増徴の見込みである」と述べており、門前町としての観光と軍人の遊興飲食に関する商業がかなり繁盛していたことが窺える（善通寺には 1899（明治 32）年に完成した劇場「富士見座」が存在しており、1921（大正 10）年に焼失した後も数ヶ月で再建、さらに善通寺南大門南にも「大栄座」という劇場が存在していた³⁸⁾）。むしろ善通寺の場合、金融恐慌ではなく、1925（大正 14）年陸軍歩兵第四十三連隊の徳島移動など、連隊縮小や移転などの「軍縮」³⁹⁾が大きな問題であった。

（2）第十一師団の終焉

1931（昭和 6）年の満州事変を皮切りに、日本は 1937（昭和 12）年、日中戦争へと突入、後に太平洋戦争へと続いていく。これに応じて第十一師団の出動・帰還も頻繁に行われ、昭和初期の善通寺町では、師団に対する町をあげての歓送迎ぶりが多く見られた⁴⁰⁾。善通寺駅からの出征には町役場でサイレンを鳴らして町民に予告するなど、出征軍人の家族は勿論、町長、町会議員、役場を始めとする公署吏員、その他の団体代表者、小中学校の児童・生徒をあわせ、約 7000 人が見送りに出たとされている。善通寺町内でも 1939（昭和 14）年の善通寺銃後奉公会の設置や、「善通寺町税条例」（生活用品に税をかける）を施行して戦争に協力し、師団が身近にある環境として、軍部への協力姿勢には強いものがあつた。しかし、戦況が悪くなるにつれ、強い統制経済下における物資不足と偏在による物価高騰、出征による人員不足（労賃の値上がり）により、善通寺の主たる事業となっていた土木工事や建設事業の予算に増額が相次いだ⁴¹⁾。その後、1945（昭和 20）年 2 月に香川県下（観音寺町沖合）で初めて空襲があり、四国内の連隊の中心にあつた第十

一師団地の善通寺も、本土決戦や防空訓練など臨戦態勢となる。しかし、結果的には 1942（昭和 17）年 1 月に国内で初めて開設された善通寺捕虜収容所（終戦時にはアメリカ将校・准士官以下 544 名、イギリス 404 名が収容されていた）の存在により戦災を免れ、1945（昭和 20）年 8 月終戦を迎える。これに伴い軍隊は解体され、第十一師団は終焉を向かえる。その後、師団の土地、建物は一旦国有財産化されるものの、町の復興計画として払い下げが行われている。琴平参宮電鉄においては敗戦直後、復員、引揚げ者やヤミ物資運搬客によって賑わいを見せたが、その後のバスの普及と共に、1963（昭和 38）年に廃止されている。

4. まとめ

以上を踏まえ、ここでは旧陸軍第十一師団設置が善通寺の都市形成に及ぼした影響を総括し、考察を述べる。

第一に、善通寺の近代的都市化は軍事を第一義とする思想によって強力に押し進められたことがあげられる。軍事輸送を十全に果たすための広幅員道路や讃岐鉄道の拡充、騎兵訓練を考慮した琴参電鉄の路線計画の一旦廃止など、師団の軍事活動を中心に据えた空間整備の歴史が明らかとなった。さらにこれら空間的近代化を促した行事として、1922（大正 11）年に行われた「陸軍特別大演習」が相当し、特に善通寺における鉄道機能の転機と解される。一方、これら善通寺の空間整備と同時に、遊廓の設置や師団兵の生活に即した商工業の発展など、師団の設置が門前町のみであった善通寺の産業構造を大きく変化させたことも明らかとなった。

第二に、師団によってもたらされた空間改変と産業構造の変化は、善通寺に他地域と異なった軍都独自の社会システムを形成させていたといえるだろう。これは昭和と金融恐慌による直接的な影響を受けなかったことや、師団兵の娯楽活動や軍事体制の拡大・縮減が善通寺の情勢を左右した最も大きな要因であったことから明らかといえる。

第三に、師団による善通寺への影響には住民ごとに較差が存在していたことが明らかとなった。経済的恩恵を受けた商人らとは対照的に、善通寺村西南部（大池周辺）の住民は、土地の官有地化によって逼迫した村の地租財政の犠牲者として、急激な近代化プロセスに埋もれていたと解釈できる。同住民の遊廓地請願は「師団兵舎から近すぎる」という軍部優先の理由から一蹴されたことは既に見てきたとおりである。ここで留意すべきは、師団に依存しきっていた過去の善通寺を振り返り、師団の存在を外在化して善通寺の都市形成自体を再確認する重要性であろう。つまり、今日、平和を手にした我が国が

忘れてはならない軍事的統制思想の危険性に加え、強権的な都市空間操作の悲劇としてこの史実を捉え直すべきではないか。空間的・産業的近代化の前には無力であった善通寺に、師団がもたらした数々の利益や財産と共に、寒村であったが故に助長させてしまった支配的な都市形成の歴史があったことを認識しておく必要もあるだろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、陸上自衛隊第2混成団善通寺駐屯地広報室、善通寺市立郷土館、及び「善通寺市史」編さん室元室長の吉岡伝三郎氏に多くの史料提供、およびヒアリング調査にご協力頂いた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 例えば藤原彰：軍事史，東洋経済新聞社，1961年
- 2) 例えば原 剛：明治期国土防衛史：錦正社，2002年
- 3) 荒川章二：軍隊と地域，青木書店，2001年
- 4) 星野裕司，小林一郎：明治期の砲台跡地にみる土木遺産の保存・活用について，土木史研究 No. 21，pp89-100，2001年
- 5) 日高直俊，手塚慶太，福井恒明，篠原修，天野光一：首都圏における飛行場と都市計画，土木史研究 No. 22，pp281-290，2002年
- 6) 日本建築学会四国支部：過去からの遺産を明日へ調査研究「過去からの遺産（旧陸軍善通寺市第十一師団の建築施設群）」，日本建築学会四国支部，1999年
- 7) 善通寺市立図書館：善通寺市史 第二巻，善通寺市，pp316-319，1988年
- 8) 同上書「善通寺市史 第二巻」，善通寺市，pp432，1988年
- 9) 香川県統計書 大正十年，香川県，p13，1921年
- 10) 前掲「明治期国土防衛史」，pp149，2002年
- 11) 前掲「明治期国土防衛史」，pp149-158，2002年
- 12) 陸上自衛隊第十三師団司令部・四国師団史編纂委員会：四国師団史，p31，1972年
- 13) 防衛庁戦史資料室史料 陸軍省貳大日記（明治29年2月），複写吉岡伝三郎所蔵
- 14) 善通寺市史教育委員会・市史編さん室：善通寺市史第三巻，p 859，1994年
- 15) 吉田村役場文書 明治三十一年「雑件」（前掲「善通寺市史 第二巻」，p 548，1994年）
- 16) 「香川新報」明治二十九年六月十六日号
- 17) 「香川新報」明治二十九年七月二十六日号
- 18) 前掲「善通寺市史 第三巻」，p 2-3，1994年
- 19) 「香川新報」明治三十一年六月八日号
- 20) 香川縣史 第三篇上，宮脇開發堂，pp57-60，1910年
- 21) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp833-838，1994年
- 22) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp817-818，1994年
- 23) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp822，1994年
- 24) 善通寺町事務報告（大正十一年）（前掲「善通寺市史 第三巻」，pp826-830，1994年）
- 25) 四国鉄道75年史編さん委員会編：四国鉄道75年史，日本国有鉄道四国支社，pp22-23，1965年
- 26) 「香川新報」大正十一年一〇月一日号
- 27) 前掲「善通寺市史 第三巻」，p170，1994年
- 28) 琴平参宮電鉄株式会社社史編さん委員会：六十年史，p29，琴平参宮電鉄株式会社，1971年
- 29) 前掲「善通寺市史 第三巻」，p 169，1994年
- 30) 香川県高等学校教職員組合：戦跡を歩く 教室で平和を語ろう 5 善通寺，p 14，1996年
- 31) 前掲「善通寺市史 第三巻」，p170，1994年
- 32) 明治35～45年善通寺町予算額表（前掲「善通寺市史 第三巻」，p38，1994年）より算出
- 33) 善通寺村及び吉田村明治二三年度歳入豫算表（前掲「善通寺市史 第二巻」，p 455-460，1994年）
- 34) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp876-882，1994年
- 35) 「香川新報」明治三十一年七月十三日号、同十四日号
- 36) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp240-242，1994年
- 37) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp240-245，1994年
- 38) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp1091-1093，1994年
- 39) 第十一師団歴史 第二巻（自大正六年 至昭和六年），三月二十八日，四月十六日，四月二十四日～二十六日，五月一日～三日，複写吉岡伝三郎所蔵
- 40) 前掲「善通寺市史 第三巻」，pp980-985，1994年
- 41) 昭和一五年九月二九日招集ノ分「善通寺町会議録」（前掲「善通寺市史 第三巻」，p366，1994年）